＜ 群馬県教育委員会 オンラインサポート授業 ＞

社 会「日清・日露戦争後」【要点資料】

学習の要点

日清・日露戦争後の様子を韓国、中国、日本を中心に明らかにしよう。

～韓国～

1905年 韓国統監府を置く
初代統監
伊藤博文

- 日露戦争の最中から、韓国は日本の植民地化の圧力にさらされる。
- 日本は1905年 韓国の外交権をうばう。
- 韓国統監府を置き、初代統監に伊藤博文が就任

1907年 義兵運動

- 韓国の皇帝は退位、軍隊も解散させられる(日本に)
- 日本へ抵抗運動が起こる→義兵運動
- 日本軍が鎮圧

1910年 韓国併合

- 1910年日本は韓国を併合(韓国併合)
- 「朝鮮」と呼ばれる
- 朝鮮総督府を設置→武力で民衆の抵抗をおさえる
- 植民地支配を進める
- 日本史や日本語を教え、日本人に同化させる教育を行う
- 植民地支配は1945(昭和20)年日本の敗戦までつづく

～中国～

1911年 辛亥革命
1912年中華民国が建国
(アジアで最初の共和国)

孫文

三民主義
- 民族の独立
- 政治的な民主化
- 民衆の生活の安定

○1912年臨時大総統に
○首都は南京

袁世凱

○清の皇帝を退位させる
→清は滅ぶ
○臨時大総統になる
○首都は北京

○清をたおして、漢民族の独立を目指す！革命運動！

○孫文の臨時政府は軍事的に弱い・・・
→臨時大総統の地位を袁世凱に
○袁世凱は独裁的な政治を行う
○袁世凱の死後、各地に勢力を持つ軍閥によってバラバラに支配される。

～日本～

1880年代後半 産業革命
(イギリスより約100年遅れて)
1889年東海道線が全線開通
1890年国産の綿糸生産量が輸入を上回る
1906年主要な民営鉄道が国有化

○交通機関の発達が、産業の発展を支えた。
○1889年に東京－大阪を結ぶ大動脈となった。
○1906年には、軍事や経済上の必要から国有化された。
○海外航路の発達も貿易の発展を支えた。

※日露戦争中に日本軍が占領し、ポーツマス条約でさまざまな権利を獲得したことで満州の南部を勢力範囲とした。
南満州鉄道株式会社(満鉄)を設立→満州での利権を独占
次第にアメリカと対立するようになる

産業革命

- 紡績、製糸など軽工業中心
- 綿糸生産→輸出先は朝鮮、中国へ
- 製糸業→アメリカ向けの輸出によって発展、日露戦争後は世界最大の輸出国に。
- 重化学工業→日清戦争後、八幡製鉄所が建設
- 1901年操業開始国内の鉄鋼生産の大部分を占め、後の重化学工業発展の基礎となった。

・綿花からつくられる糸を綿糸、綿糸をつくるのが紡績業
・繭から生糸をつくるのが製糸業・・・富岡製糸場の開設により機械を使った製糸業がすすめられた。

※日清戦争で得た賠償金を元に建設
清(中国)から輸入した鉄鉱石を原料とし、筑豊炭田(福岡県)で得られる石炭を動力源として、製鉄が行われた
※筑豊炭田・・・当時の日本では最大規模の石炭の産出地

資本家と労働者

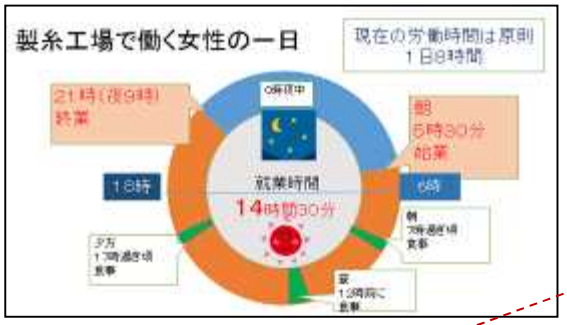
- 資本主義の発展とともに労働者増加
- 紡績業や製糸業の労働者は大半が女子
- 賃金は低く、
  紡績：1日12時間の昼夜二交替
  製糸：1日14～18時間
- 男子は鉱山や運輸業で働く
- 日清戦争後に労働組合が結成→労働条件の改善を求める労働争議が増加
- 1911年12歳未満の就労禁止、労働時間の制限を定めた
- 三井、三菱、住友、安田など経済を支配する財閥へ成長

【岩崎弥太郎】
1873年 三菱を創立
日清、日露戦争の時に事業を広げ軍事輸送で大きな利益を得た

地主と小作人

- 農業：都市の人口増加、鉄道の発達により農作物の商品化が進む
- 製糸業の発展でクワの栽培や養蚕が盛んに
- 資本主義の発展により、全体に人々の生活は次第に豊かに。
- せまい土地しかもたない農民、小作人は子どもを工場働きに出したり、副業を営んだりして生活をした。
- 生活が苦しくなった農民から農地を買い集めた地主は力をつけ、資本主義との結びつきを強めた。

都市部は発展し人口増加、農村部では子どもが工場で働いたり、農地を売ったりと産業革命によって、貧富の差が生まれた。



※各国とも外国との関わりの中で変化してきた。

韓国	中国	日本
1910 年	1911 年	日清・日露戦争
→韓国併合	辛亥革命	産業革命により
	1912 年	成長をとげる
	中華民国　建国	

〈まとめ〉

韓国は、日本による韓国併合により植民地支配されるようになる。中国では孫文を中心とした辛亥革命がおき中華民国が建設された。日本は、日清・日露戦争により国際的な地位を高め、産業革命により国として成長をとげることができた。